

## 国語の力その2

2024. 7. 26

国語の授業を行っている先生方に聞いてみたい。「先生は、この授業で何を教えたいのですか？子どもに、どんな力を身につけさせたいのですか？」明確に答えられるだろうか。ここが、国語の授業の弱点であり、むずかしいところでもある。もし、先生方が、授業のたびに、前述の質問を自問自答してくれたら、国語の授業は変わっていくはずである。

どうも、国語の授業は釈然としない。何だか曖昧である。教科書に載っている文章を、計画性をもって綿密に指導したとする。果たして、子どもたちに確固たる国語力をつけさせているという実感をもつことができるだろうか。どんな力を身につけさせたいかの「どんな力」の部分が、いつも曖昧なのである。

小学校の先生をしているときは、ほとんどの教科を自分が担当していた。どうしても、何だか中途半端になってしまうのは否めなかった。すべてを全力というのには無理があると感じた。では、どうしたらよいのか。そんなことを考えていた。

縁あって、中学校の先生となった。今度は、国語だけである。国語専門の先生である。もう中途半端などとは言ってはられない。国語に全力投球するのみである。今思えば、国語でよかった。国語力は、子どもの人生を決める原動力となり得るからである。それだけ、責任重大ということである。それが、やりがいとなる。

ずっと考えていた。どんな読解問題でも、どんな作文課題でも、すべてに共通しており、有効な方法があるはずだ。中学校で国語を担当しているうちに、そのことがだんだんと見えてきた。少しずつ、わかってきた。

方法というものは、誰にでもまねできるものでなければならない。いわば、国語の公式のようなものである。それは一言でいえば、「論理」である。その論理を使いこなす力が、「論理的思考力」である。こう言ってしまうと、先生方には、さほど珍しくもない話になってしまう。保護者にとっては、むずかしそうな内容になってしまうかもしれない。

本屋さんに行けば、ビジネスマン向けの論理的思考力を高める本は、容易に見つけることができる。それだけのニーズがあるということであろう。ところが、子どもの論理的思考力を高める本を見つけるのは簡単ではない。まだまだ開発途上なのかもしれない。あるいは、論理というと、子どもにはむずかしいという先入観があるのかもしれない。

論理とは、大人だけのものなのだろうか。子どもは、論理的にものごとを考えることができないのだろうか。そんなことはない。子どもによって差はあれど、6歳ぐらいですでに、論理的にものごとを考える素地は十分に育っていると考えるべきである。論理的思考力の“芽”は、どの子にも見られるものである。幼稚園でも、その芽生えを見ることができる。論理とは、大人だけのものではない。子どものうちから、じっくり、しっかりと育てていくべきものである。